

調査報告

ロマンス言語学の論点—ある調査報告より (3) Aspetti problematici della linguistica romanza A proposito di alcune recenti indagini (3)

菅田 茂 昭

Shigeaki SUGETA

1. 派生と合成のインターフェース— B.Migliorini (1896-1975) 没後 30 年

語形成自体が共時と通時のインターフェースに位置づけられることを、報告者はすでに“ソシユール国際シンポジウム”(早稲田大学 1992)にて“ソシユールと語形成”(Sugeta 1995 :125-128)のなかで指摘しているが、その語形成の主体をなす派生と合成の間にもインターフェースが認められるのではないか。その可能性については Leuven における発表(1998)のなかでわずかに触れたが(Sugeta 2000 :1, 133)、本年は Migliorini 没後 30 年に当たることにちなみ、同教授が 1935 年 *prefissoide*, *suffissoide* と名付けられた概念は、こんにちのことはでいう派生と合成のインターフェースと解釈しうることを提案したい。そこには文法化の芽を見ることもできそうである。

派生と合成の課題は、生成あるいは語彙形態論の確立により、屈折との関係も見直され、こんにちでは新しい局面に達しているといえるが、ここでは派生と合成の区別が不能となる現象に立ち止まってみたい。この点に早くから着目された学者として B.Migliorini が想起される。

《Alcuni elementi di composti più frequentemente adoperati hanno finito con l'assumere, in circostanze che cercheremo di precisare, un valore quasi di prefissi, hanno acquistato cioè la possibilità di essere preposti a qualsiasi termine del lessico che semanticamente lo consenta ..., che potremmo chiamare prefissoidi》(Migliorini 1963^a :9-10)

合成語の要素のうちほとんど接頭辞の価値を担っているものがあるとして *autotrasporto* 「トラック輸送」、*motocisterna* 「タンク車」、*radiodiscorso* 「ラジオ談話」などの例を挙げられ、*prefissoide*(擬似接頭辞)と呼びうるとされた。*aero-*(または *aereo-*) 「航空」、*auto-* 「自力」「自動車」、*cine-*(*cinema-*) 「映画」、*elettro-* 「電気」、*fono-* 「音」、*filo-* 「親」、*tele-* 「遠い」などのほか *radio-* 「ラジオ」には *radiocommedia* 「ラジオ・コメディ」ほか 50 以上の例が集められている。確かにその多くはこんにちに至るまでギリシャ・ラテン起源の要素として扱われてきたものである。たとえば L.Serianni (1988 :561), I.Bosque – V.Demonte (1999 :3, 4799-4804) とともにそれぞれ *composti scientifici con elementi greco-latini*, *compuestos nominales con temas grecolatinos* といった見出しで取扱ってい

る。最新の Grossmann-Rainer (2004 :69-95) においても同様に *composizione con elementi neoclassici* という表現が見られる。B.Migliorini の指摘はおよそ 30 年を経た A.Martinet (1960 :4. 36) に改めて取り上げられている。派生と合成の共通性と差異を論じる過程で、合成語の要素が合成語でしか使われなくなると接辞に移るとして英語の *boyhood* 「少年期」、ドイツ語の *Freiheit* 「自由」を挙げ、これはまさに二つの手順の密接な親族関係を説明すると述べたあと、学者語の *thermostat* 「サーモスタット」 < *thermo*-と *-stat*, *télévision* 「テレビ」 < *télé*-と *vision* などの合成語において *thermo*-, *télé*-がこの結合を離れて他の要素とも自由に結び付き接辞のごとく振舞っている派生とも合成ともいえない特殊な言語状況を *recomposition* (再合成) としているが、再版(1980 :4. 36, さらに 1985 :33) では *confixe* (合接辞) と名付けている。もちろん A.Giurescu (1975 :39-40) にも同じ状況への言及が見られる。S.Scalise (1994 :81) は *affissoide* (擬似接辞) に対して *semiparole* (準単語) を充てている。なお *confixe* なる用語は小辞典であるが J.C.Moreno Cabrera の *Diccionario de lingüística* (1998 :37) には *confijo* として見出される。(序でながら A.Martinet の *confixe* は、泉井久之助が提唱したが一般化していないとされる共接辞[英 *confix*, 仏 *confixe*] とは内容的にも無関係である。cfr. 『言語学大辞典』第 6 巻、三省堂、1995 :290)。

confixe はイタリア語では *confisso* と呼ばれ、ことに De Mauro の *Grande dizionario* (1999) において *acchiappamosche* 「ハエ捕り」、*porta ombrelli* 「傘立て」、*portaereo* 「空母」*rompscatole* 「迷惑な人」などの V+N 型の合成名詞 286 項目を始めとして、さらに *parola chiave* 「キー・ワード」、*persona chiave* 「中心人物」などの N+N 型の合成名詞についても、イタリック体で示した現代語で繰り返し使用される要素が *confisso* として捉えられ、約 2600 項目がその名のもとに登録された。従来からの要素もたとえば *auto*- 「自力」を 452 項目、*auto*- 「自動車」を 118 項目、*neo*- 「新」を 355 項目、*termo*-, *-termo* 「熱」を 195 項目、*tele*- 「遠い」を 136 項目といった具合に収録している。そこでは Martinet の用語が現代語の慣用の分析に大幅に拡大されていることが評価される。同教授によれば *confisso* は *prefissoide* と *suffissoide* を区別なく総称できるため、事実 *fono*- (*fonografo* 「レコード・プレーヤー」)、*-fono* (*telefono* 「電話」) のような用例に対して有効な用語として採用しているとのことであった。

派生と合成は、形態論と統辞論との関係に対応し、それは膠着と孤立の関係にも匹敵すると見做されるが、*confixe* はその中間相に位置する。さらに合成語の要素から接辞への移行は “Today's morphology is yesterday's syntax.” を裏付ける一種の文法化現象と考えることができる。ここでは派生と合成の中和とも呼べる現象を Migliorini に注目されて以来、Martinet を経て、De Mauro による取組みまで辿ったが、ロマンス語における派生と合成の伝統的な不釣合いの是正に両者のインターフェースにおける *confixation* (合接辞化) が大いに関わっていると見えそうである。

2. サルジニア語の3人称単数動詞語尾

サルジニア語の特質のひとつとして3人称単数の動詞語尾 *-t* の保存があげられることを報告者は第19回国際ロマンス言語学会（於 Santiago de Compostela, 1989）において提案し（Sugeta 1993 :V, 205-209）、A. Roncaglia 教授からも歴史音声学的に大変興味あるテーマであると評価していただいた。その後の調査を加えてその要旨を報告したい。ロマンス語圏においてその主要言語に固有の特質とされるものが、しばしば少数言語（方言を含む）にも、限られた範囲であれ見出されることがあることを考慮すればなおさら、サルジニア語の3人称単数の動詞語尾 *-t* はこの言語の特有性として十分な指標価値を持つと思われるからである。

ラテン語の頻度ある語末子音として、形態・統辞論的に重要な役割を果たしたものに *-m*, *-s*, *-t* があるが、ロマンス語においてはこのうち *-m* は消失、*-s* だけはロマンス語の東西二分化に関わるが、*-t* も主要ロマンス語地域ではほぼ消失したため研究対象からやや外された経緯がある。実際にロマンス言語学の概論、あるいはロマンス語の各語史において、ポンペイの落書きのひとつ *Quisquis amavalia ...* が引用され、当時の民衆のラテン語では *amat > ama* 「彼は愛す」に見られるように語末の *-t* はすでに消滅する傾向にあったことが知られるのである。

語末の *-t* はフランス語においては12世紀頃まで保存されていたようであるが、サルジニア語では動詞の屈折語尾（3人称複数を除く）において、僅かながら名詞においても (*caput > Bitti caput(e)*, *log. cabude* 「頭」) こんにちまで保存されている。あたかもバルトリの言う“孤立地域の規範”を裏付けるかにみえる。南イタリアの辺境の地にも同じ現象がみられるのも事実である。個別的な保存としてはルーマニア語における *est > este* 「～である」、フランス語におけるリエゾン、*il chante > chante-il* (*chante-t-il*) 「彼は歌う」などがあげられる。

さて、サルジニア語の動詞 *bénneru* 「来る」および *andare* 「行く」の直説法現在・3人称単数の現状を参考までに示すと、

Nuoro : *Custu piccinu benit a Nugoro.* この少年はヌーオロに來ます。

Oristano : *Custu piccioccheddu benidi a domu mia po papai.* この少年は私の家に食事に來ます。

Meana : *Fizza mia andata a zocare chin issu.* 私の娘は彼と遊びに行きます。

話しことばでは語末の *-t* は、続く語が母音で始めるとその母音と融合し、子音で始めるときは *-t* の直前の母音をそのあとに添加する傾向がみられる。その際にバルバージャ地域の中心部以外では母音に挟まれる *-t* が有声化する (Meana, Oristano の例を参照)。母音の添加にせよ、さらに有声化を受けるにせよ、ここでは *-t* が消失しないことに着目すべきである。ことに母音の添加はロマンス語における開音節の維持傾向と矛盾するものではないと考えられる。

語末の *-s* を保存する（この点ではサルジニア語は西ロマニアに属する）点がスペイン語と共通であることから、「歌う」の屈折をスペイン語と比較すると、スペイン語における完全な弁別性 *canto*,

cantas, canta に対してサルジニア語の canto, cantas, cantat では -t の必然性は薄く、そこにはむしろラテン語性の保持を主張したい。

3. サルジニア語の屈折不定詞

ポルトガル語の特質のひとつとして知られる屈折(または人称)不定詞が、その使用範囲は限定されるが、サルジニア語(統一された共通語はなく、諸方言の総称に過ぎない)にも存在することを簡単に指摘したい。インフォーマントから報告者が島に渡るたびに少しづつ採集した資料から引用すると、

Dia cherrere de *benneres* tue a domo mea. 君が私の家に来てくれればいいが。

Non cherio a *andas* tue (chi andas tue) a domo sua. 君にはあの人の家に行きたくはない。

イタリアック体で示した形式が屈折不定詞と呼ばれているものであるが、*amare* 「愛する」の語尾変化で比較してみると、ラテン語の接続法未完了過去にほぼ一致するのみでなく、こんにちのサルジニア語の接続法半過去そのものでもあることに驚かされる。

lat.	srd.
amarem	amarepo
amares	amares
amaret	amaret
amaremus	amaremus
amaretis	amarezes
amarent	amaren

この形式の起源をめぐっては、ロマニアにおけるラテン語の接続法の未完了過去および完了過去の衰退傾向と併せて不定詞を起点とする改新を説くことも可能であるが、報告者にとってラテン語の形式をこんにちまで維持しているサルジニア語に関しては、この屈折不定詞の存在にはラテン語の接続法未完了過去との関連(アクセントも含め)を否定する根拠もないように考えられる。しかし前置詞に導かれて用いられるこの形式の成立過程を解明するのは容易ではない。注意すべきは、こんにちのサルジニアにおいては使用範囲がログドレーゼ方言のなかで、年配の人たちに限られることである。しかもそれは接続法現在を用いた節(上の例のカッコ内の *chi andas tue* を参照)と交換(選択)可能な関係にあることは見逃せない。ポルトガル語、ガリシア語、ミランダ語、古ナポリ方言などとの繋がりは今後の課題である。

付記：以上の調査研究に当たり、科研費および早稲田大学特定課題研究助成費をいただいたことに感謝します。

参考文献

- Blasco Ferrer Eduardo, 1984, *Storia linguistica della Sardegna*, Tübingen, Niemeyer.
- Blasco Ferrer Eduardo, 1986, *La lingua sarda contemporanea*, Cagliari, Edizioni della Torre.
- Booij Geet et al. (ed.), 2000, *Morphologie - Ein internationales Handbuch zur Flexion und Wortbildung*, Berlin, Walter de Gruyter.
- Booij Geet - van Marle Jaap (ed.), 2001, *Yearbook of Morphology 2000*, Dordrecht, Kluwer Academic.
- Bosque Ignacio-Demonte Violeta (ed.), 1999, *Gramática descriptiva de la lengua española 3*, Madrid, Espasa.
- De Mauro Tullio, 1999, *Grande Dizionario Italiano dell'Uso*, Torino, UTET.
- De Mauro Tullio, 2000, *Il dizionario della lingua italiana*, Torino, Paravia.
- Giurescu A., 1975, *Les mots composés dans les langues romanes*, The Hague, Mouton.
- Grossmann Maria - Rainer (a c. d.), 2004, *La formazione delle parole in italiano*, Tübingen, Max Niemeyer.
- Hopper Paul J. and Tragott Elizabeth Closs, 1993, *Grammaticalization*, Cambridge University Press.
- Jones Michael Allan, 1993, *Sardinian Syntax*, London, Routledge.
- Martinet André, 1960(1980), *Éléments de linguistique générale*, Paris, Armand Colin.
- Martinet André, 1985, *Syntaxe générale*, Paris, Armand Colin.
- Migliorini Bruno, 1963³, *Saggi sulla lingua del Novecento*, Firenze, Sansoni.
- Moreno Cabrera J.C., 1998, *Diccionario de lingüística neológica y multilingüe*, Madrid, Síntesis.
- Scalise Sergio, 1994, *Morfologia*, Bologna, il Mulino.
- Scida Emily, 2004, *The Inflected Infinitive in Romance Languages*, New York, Routledge.
- Serianni Luca, 1988, *Grammatica italiana*, Torino, UTET.
- Spencer Andrew - Zwicky Arnold M. (ed.), 1998, *The Handbook of Morphology*, Oxford, Blackwell.
- Sugeta Shigeaki, 1993, *La terza persona singolare del verbo in -T fra le proprietà della lingua sarda*. In : Lorenzo R. (ed.), *Actas do XIX Congresso Internacional de Lingüística e Filoxía Románicas*, A Coruña.
- Sugeta Shigeaki, 1995, *F. de Saussure et la formation des mots*. In : De Mauro - Sugeta (ed.), *Saussure and Linguistics Today*, Roma, Bulzoni.
- Sugeta Shigeaki, 2000, *Fra la derivazione e la composizione - l'italiano del Novecento fra le*

- lingue romanze*, In : Vanvolsem S. et al. (a c. d.) *L'italiano oltre frontiera - V convegno internazionale*, Leuven University Press.
- Sugeta Shigeaki, 2002, *Il sardo nel panorama romanzo*. In : De Mauro - Sugeta (ed.) *Lesser-used Languages and Romance linguistics*, Roma, Bulzoni.
- Sugeta Shigeaki, 2004, *Riflessioni sulla lingua sarda*. In : Turchi Dolores (a c. d.), Max Leopold Wagner - *Lingua e cultura sarda (Atti del Convegno Internazionale di linguistica sarda)*, Oliena, IRIS.
- Tuson Jesús, 1994, *Introducció a la lingüística*, Barcelona, Columna.